



THE PROJECT FOR THE DEVELOPMENT OF
THE BEIJING CENTER FOR JAPANESE STUDIES
IN THE PEOPLE'S REPUBLIC OF CHINA

PACIFIC CONSULTANTS INTERNATIONAL

Perspective -2



THE PROJECT FOR THE DEVELOPMENT OF
THE BEIJIN CENTER FOR JAPANESE STUDIES
IN THE PEOPLE'S REPUBLIC OF CHINA

PACIFIC CONSULTANTS INTERNATIONAL

Model Photos



センター最大の会議スペースとして頻りに利用されている。30人規模の会議（2～3回/月）、日中双方の先生による全体会議（3回/学期）等があり、また、シンポジウム時の集合場所ともなっている。



視聴覚室の様子。最大で50人を収容できるため、大規模な授業、講演会、論文発表会等に週2～3回の頻度で利用されている。テレビが設置されているが、視聴覚室としての機能はない。



教室は、教室兼自習室として利用されている。学生は各机に個人所有物を保管し、そこで自習する。ただし、授業が行われている間は場所を移動しなければならず、主に図書館を利用している。



既存のセンターをアプローチ道路より見る。1950年代建設の建物は老朽化が進み、機能的にも施設構造的にも限界に達している。



センターの中廊下の様子。日はほとんど入らず、常に薄暗いため、天井に自動点灯式の蛍光灯が設置されている。学生が溜まるためのスペースもない。



コンピュータ室の様子。9台設置され、学生及び教員が自由に使用できるが、需要が高く、授業後は多くの学生が順番待ちをしなければならない状況である。



図書資料室の様子。開架図書として、日本語図書約4万冊等を所蔵している。蔵書のデータベース化も進められており、専門職員により非常に良く管理されている。



既存センターのエントランス。「日本学研究中心」のプレートにより、辛うじてここがセンターであることが認識できる。



建設予定地を敷地内北東角より見る。敷地は北京外国語大学東院の正門から約200mの距離にある。北側はテニスコート、東西及び南側は教員住宅に面し、静かな環境である。敷地は平坦で造成上の問題はない。設計条件として、新設の建物と東西両側にある教員住宅（写真右端に見える建物）との間隔を13m保つこと、また、敷地南側に並ぶ樹木を残すことが求められている。



北京外国語大学新図書館の外観。中国語図書約40万冊を収蔵する。センター図書室は全面開架式であり、運営形態が異なることから、相互の施設の共有は困難と判断された。



建設予定地を北西角より見る。周囲には樹木が立ち並び、フェンスが張ってあり、新センターへのアクセスの都合上、撤去する必要がある。



外研社の外観。外大に属する出版社で、出版事業は外大の大きな収入源である。建物は中国ローカルによるものだが、設計・施工精度とも高いレベルにあり、本件でも参考となる点が多い。



国際交流学院の外観。外大の管轄・運営のもと、留学生事業を展開している。2000年5月竣工の新しい建物だが、外壁に無造作に室外機が取り付けられる等、設計・施工共従来型である。



北京外国語大学構内の建設工事現場の様子。コンクリート打継部は粗雑さが目立ち、モルタル仕上げにより精度を上げている。本件の施工監理では、万全な品質管理体制が求められる。



東院正門奥の教室・事務管理棟。日字学研究センターと同時期に建てられたもので、開口部、外観の意匠は同じ形態となっている。